

2021（令和3）年度 自己点検・評価活動について（報告）

1. 実施目的

本年度の自己点検・評価活動の目的は次の4項目である。

- ①新たに導入した自己点検・評価システムで、全教職員ができる範囲で自己点検・評価を実施する。
(まずは、どのような形であろうと実施するということが大切だと考える。又、ある決められた点検・評価シートに沿った形ではあるが、全教職員に1年間の業務を振り返るという習慣をつけたいというねらいがある)
- ②「全学レベル」「組織レベル」「個人レベル」で自己点検・評価した結果を、他者が評価するという、相互確認の方法で自己点検・評価シートを作成する。
(他者が自分の1年間の業務の成果をどのように評価するか、評価する側、評価される側、それぞれが評価を通して、大学全体、組織、個人について考えてもらいたいというねらいがある)
- ③本年度の自己点検・評価の作業を通して、自己点検・評価を実施することの大切さを教職員一人一人が理解する。
(本学の教育の質保証、引いては、内部質保証を行っていくためには、自己点検・評価は必須であり、その意味を全教職員に理解してもらいたいというねらいがある)
- ④本学は、2023（令和5）年度に公益財団法人日本高等教育評価機構による認証評価を予定している。従って、2022（令和4）年度の自己点検・評価の作業が円滑に実施できるよう、今年度実施したシステムの問題点の抽出や改善につなげる。
(本年度実施した自己点検・評価システムをたたき台として、次につなげて欲しいというねらいがある)

2. 実施スケジュール

本年度の実施スケジュールは、図1に示す通りである。新しい自己点検・評価システムができたのが2021年11月であったため、自己点検作業の開始が遅くなっている。来年度からはスケジュールについて見直す必要がある。

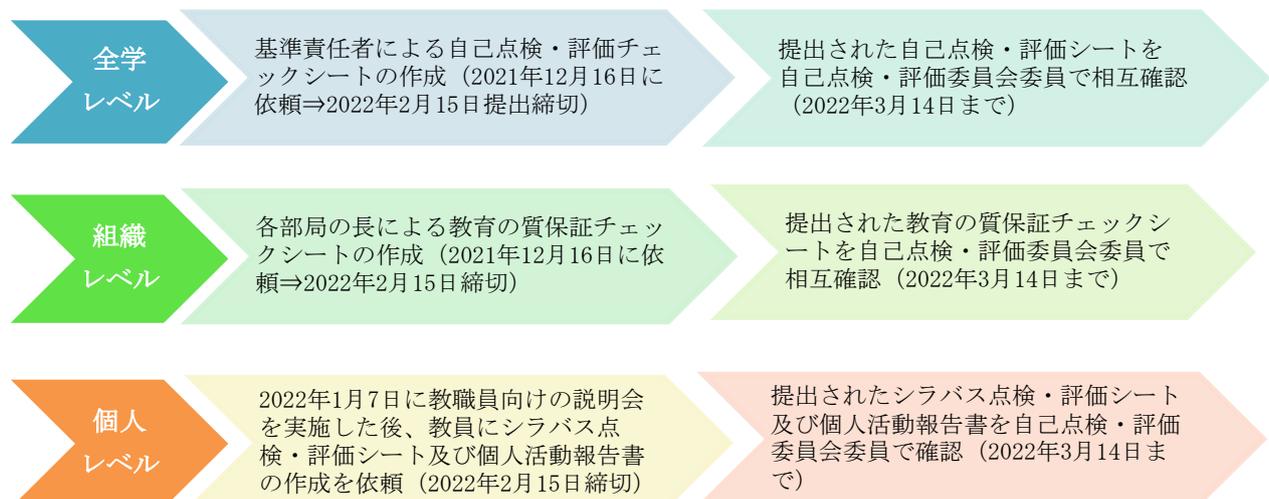


図1 実施スケジュール

3. 自己点検・評価結果について

[1] 全学レベル

全学レベルの自己点検・評価チェックシートについては、公益財団法人日本高等教育評価機構における「評価基準」項目、本学の中期計画等に沿った項目、学長が定める点検項目の3つから構成されている。基準項目の項目名、基準責任者及び担当部署等の長は、シートの1ページ目の表に示す通りである。

各基準責任者と担当部署等の長を中心に自己点検・評価した結果が「Ⅰ. 自己点検・評価－1. 自己点検・評価結果<評定>、2. 自己点検・評価、3. 伸長・改善に向けた取組、4. 根拠資料」になる。それを執筆者以外の基準責任者と自己点検・評価委員会委員で相互に確認した結果を「Ⅱ. 評価結果」に記入している。

今年度の自己点検・評価結果（基準項目と評定の関係）は図2に示す通りである。今年度の主要課題としては、「大学院研究科の改組・改革」「グローバル化の推進」「地域連携の強化」の3つをあげている。

なお、<評定（自己点検・評価基準）>の「A・B・C・D」は、次の状況を示している。

「A」：満たしている／前年度の改善・向上方策：全て達成済
「B」：満たしている／前年度の改善・向上方策：計画進行中
「C」：満たしている／前年度の改善・向上方策：計画検討中
「D」：満たしていない／認証評価で「不適合」若しくは「改善点」として指摘される可能性が高い

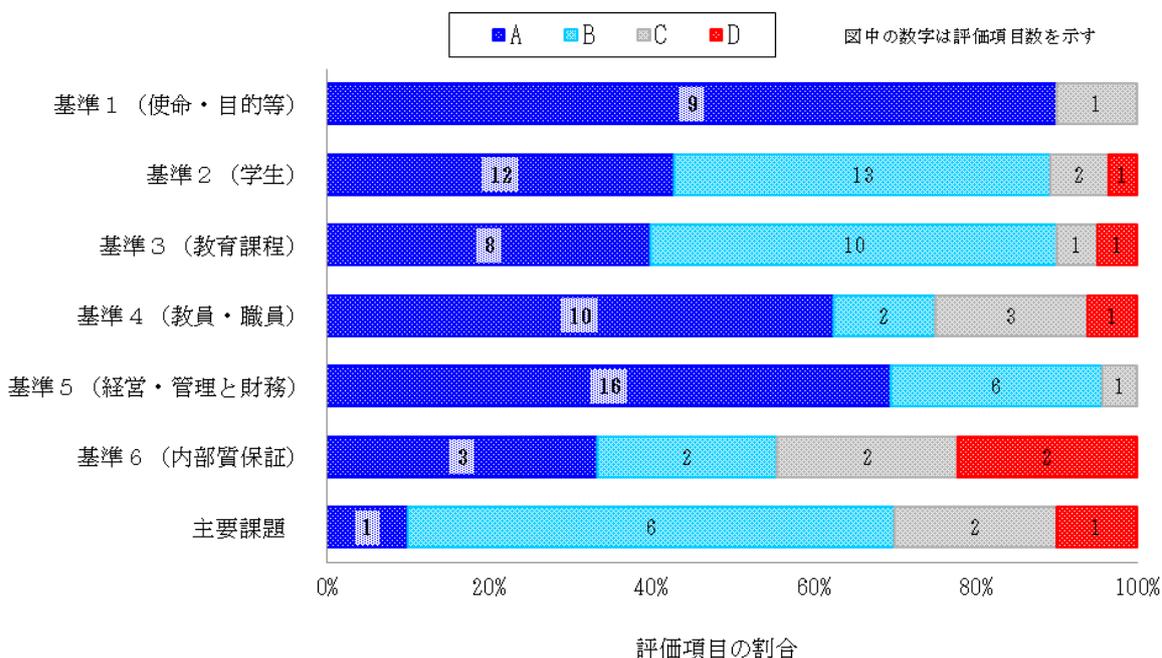


図2 基準項目ごとの評定の状況

「D」と自己評価された項目は表1に次の通りである。「C」と自己評価された項目も含めて、来年度、進め方について検討が必要である。「B」と自己評価された項目については、計画はできているので、その計画を進める必要がある。又、「A」と自己評価された項目についても、来年度も「A」となるよう引き続き、実施することが大切である。

表1 「D」と自己評価された項目

項目 No.	評価項目
212	教育を行う環境の確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を適切に確保しているか。
313	DPを踏まえた進級基準を適切に定め、厳正に適用しているか。
443	研究活動への資源配分に関する規則を整備し、設備などの物的支援とRA (Research Assistant) などの人的支援を行っているか。
624	現状把握のための十分な調査・データの収集と分析を行える体制を整備しているか。
632	自己点検・評価、認証評価及び設置計画履行状況等調査などの結果を踏まえた中長期的な計画に基づき、大学運営の改善・向上のために内部質保証の仕組みが機能しているか。
A3	大学院附置研究所構想の検討に着手しているか。

[来年度に向けて]

- ・自己点検・評価委員会委員から「Ⅱ. 評価結果」の総評及び課題事項に書かれたことは、非常に大切であり、各部局で対応方法を検討する必要がある。
- ・「Ⅱ. 評価結果」の長所・特色については、全ての評価項目共に空欄となっている。各評価項目の長所・特色を見いだすことが大切である。
- ・「2. 自己点検・評価」の根拠資料の書き方が基準責任者ごとで異なっているので、書き方を統一する必要がある。
- ・今年度、大学が現代生活学部の1学部制から現代生活学部と人間栄養学部の2学部制とした完成年度を、大学院人間生活学研究科が生活文化専攻から家政学専攻と栄養学専攻の2専攻制にした完成年度をそれぞれ迎えている。来年度の自己点検・評価の一つとして、大学・大学院の改組の結果を振り返る意味でも点検・評価項目としてあげることが必要である。

[2] 組織レベル

組織レベルの教育の質保証チェックシートについては、次の3つの資料に記載されている内容から質問項目を選び出し、書式については、東京都立大学が使用している「2019年度版教育の質保証チェックシート」を参考に作成している。

- ・中央教育審議会大学分科会 大学教育部会が2016年3月31日に刊行した「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン
- ・大学改革支援・学位授与機構 質保証システムの現状と将来像に関する研究会が2017年3月31日に刊行した「教育の内部質保証に関するガイドライン」
- ・令和2年度(2020年度) 私立大学等改革総合支援事業調査票

上記のように作成した教育の質保証チェックシートを、各部局(学部・学科、研究科)の長が自己点検・評価した結果が「教育の質保証チェックシート②チェック項目」になる。それを他の部局の長が確認し「③評価結果」に記入し、そして、最終的には、自己点検・評価委員会委員が確認し「③評価結果」に記入している。

教育の質保証チェックシートの各部局(2学部5学科・1大学院人間生活学研究科)のチェック状況(は

い・いいえの状況)は次の通りである。

1. 3つのポリシー

(1) 卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)

ディプロマ・ポリシーに次の各項目に係る記述が含まれている。	はい	いいえ
• 学生が身につけるべき資質・能力の目標となる記述となっている。	8	0
• 「何ができるようになるか」に力点を置き、どのような学修成果をあげれば、卒業を認定し、学位を授与するのが具体的に示されている。	7	1
• 学生の進路先など、社会における顕在・潜在ニーズに係る記載が含まれている。	6	2

(2) 教育課程の編成・実施方針 (カリキュラム・ポリシー)

	はい	いいえ
• カリキュラム・ポリシーにおいて、学生や授業科目を担当する教員が分かりやすいように、「①教育課程の編成の方針」「②教育課程における教育・学修方法に関する方針」「③学修成果の評価の方針」の各項目に係る記述が含まれている。	8	0
• カリキュラム・ポリシーの内容が、ディプロマ・ポリシーに定める「獲得が期待される能力」が獲得可能なことを確認できる程度の整合性を有している。	6	2
• 能動的学修の充実等、大学教育の質的転換に向けた取組を重視していることが確認できる記述が含まれている。	8	0
• カリキュラム・ポリシーの内容が大学等の目的と整合性を有している。	8	0

(3) 入学者受入の方針 (アドミッション・ポリシー)

アドミッション・ポリシーにおいて、次の各項目に「 」内の記述が含まれている。	はい	いいえ
• 求める学生像については、「入学前に学習しておくことが期待される内容」	7	1
• 入学者選抜の基本方針については、「入学者受入方針を具現化するためにどのような評価方法を多角的に活用し、それぞれの評価方法をどの程度の比重で扱うのか」	2	6
• 「受け入れる学生に求める学習成果 (学力の3要素)」について、どのような成果を求めるのか	7	1

2. 教育課程・学修成果

(1) 教育課程

	はい	いいえ
• カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、履修モデル、科目ナンバリングなどで、教育課程の体系性が確認できる。	8	0
• 教養教育及び専門教育のバランス、必修科目・選択科目等の配当など、カリキュラム・ポリシーに基づいて授業科目が配置され、教育課程の体系性が確保されている。	8	0
• 初年次教育やキャリア教育に係る授業科目が配置されている。	8	0
• アクティブ・ラーニング型 (課題解決型学習 [PBL]、反転授業、ディスカッション・ディベート、グループワーク、プレゼンテーションなどの要素を含む) 科目を開講している。	8	0
• 大学院において、指導体制を整備すると共に、研究倫理に関する教育・指導が行われている。	1	0

(2) 授業の内容・方法

	はい	いいえ
◆ 授業科目の内容が、1単位につき45時間の学習を必要とする内容になっており、授与する学位に相応しい水準であることを確認している。	7	1
◆ アクティブ・ラーニング、少人数教育、PBL型授業、フィールド型授業など、学習指導法の工夫が行われている。	8	0
◆ 全科目のシラバスに、授業名、担当教員名、授業の目的・到達目標、授業形態、各回の授業内容、成績評価方法、成績評価基準、準備学習等が記載されており、ウェブサイトへの掲載等により学生に周知を図っている。	8	0
◆ CAP制を導入している。	6	2
◆ 学生による授業評価等の内容を組織的に確認し、授業改善に活用している。	7	1

(3) ファカルティ・ディベロップメント (FD)

	記載している状況	あり	なし
◆ 部局(学部・学科・研究科)独自で実施しているFD活動の概要(実施内容・方法、参加者数等)を記載してください。		2	6
◆ 部局独自のFD活動の参加率を上げるために実施している取組がありましたら、その概要について記載してください。		1	7

(4) 履修指導体制・学習相談体制

次の取組を実施している。	はい	いいえ
◆ 履修ガイダンス	8	0
◆ クラス担任制	8	0
◆ ティーチング・アシスタント(TA)等の教育支援制度	7	1
◆ オフィスアワーの設定	8	0
◆ 学修成果の状況の組織的把握と対応	7	1
◆ 学習計画の指導	8	0
◆ 基礎学力不足の学生に対する指導・助言	7	1

(5) 成績評価

成績評価に関する次の記述に回答してください。	はい	いいえ
◆ 成績評価基準について、科目の到達目標を考慮した判断基準を組織として定めている。	5	3
◆ 学生に対して、成績評価基準を刊行物の配付、ウェブサイトへの掲載等の方法により周知している。	8	0
◆ 学修成果の評価の方針(アセスメント・ポリシー)に照らして成績評価の分布の点検を組織的に実施している。	1	7
◆ 個人指導等が中心となる科目では、成績評価の客観性を担保するための措置を実施している。	3	5
◆ 成績評価基準とは別に、成績評価分布のガイドラインの策定や答案の返却、模範解答あるいは採点基準の提示等を行っている。	2	6

(6) 卒業・修了判定

卒業（修了）判定に関する次の記述に回答してください。	はい	いいえ
◆ 卒業（修了）要件が組織的に策定され大学設置基準等が定める要件と整合性を組織として定めている。	8	0
◆ 学生に対して卒業（修了）要件を刊行物の配付、ウェブサイトへの掲載等の方法により周知している。	8	0
◆ 卒業（修了）要件の審査が定められた手順どおりに実施されている。	8	0
◆ 学位論文の審査が定められた手順通りに実施されている。	8	0

(7) 学修成果

学修成果に関する次の記述に回答してください。	はい	いいえ
◆ 標準修業年限内の卒業（修了）率、資格取得の状況、進路状況等を、学部（学科）・研究科として確認し、学修成果の把握・評価に取り組んでいる。	8	0
◆ 就職率（進学率）の状況、主な就職先（進学先）を確認し、学修成果の把握・評価に取り組んでいる。	7	1
◆ 卒業（修了）時の学生アンケートにより、卒業（修了）時点の学生に対し、大学等の目的及びディプロマ・ポリシーに則した学修成果が得られていることを確認している。	5	3
◆ 学修成果を可視化している。	5	3
◆ 学修成果の点検・評価結果を教育内容・方法及び学修指導の改善のために活用している。	5	3

教育の質保証チェックシートから分かることは、次の通りである。

[各部局（学部・学科、研究科）の状況]

- ◆ 各部局共に、3つのポリシーが適切に策定されている。
- ◆ アドミッション・ポリシーにおいて、【入学者選抜の基本方針については、「入学者受入方針を具現化するためにどのような評価方法を多角的に活用し、それぞれの評価方法をどの程度の比重で扱うか」という記述が含まれているか】というチェック項目に対して、食物学科と人間栄養学部以外の学部・学科の回答が「いいえ」となっている。
- ◆ 今年度完成年度を迎えたこともあり、食物学科と人間栄養学科はカリキュラムの見直しや改定作業に着手している。児童学科については、教育課程を充実させるために基礎学力の向上を目指す科目や様々な地域貢献活動を取り入れている。又、卒業研究に向けて研究倫理に関する教育を実施している。
- ◆ 児童学科を除いて、ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動が大学全体で実施している内容だけになっている。
- ◆ 【学修成果の評価の方針（アセスメント・ポリシー）に照らして成績評価の分布の点検を組織的に実施している】というチェック項目に対して、現代生活学部以外の学部・学科、研究科の回答が「いいえ」となっている。

[各部局（学部・学科、研究科）の優れている取組]

教育の質保証チェックシートから読み取れる「優れている取組」は、次の通りである。（なお、今回

は初めてと言うこともあり、チェックシートに書いていないだけで、各部局共に高く評価できる取組を実施しているように考えている。）

- ・新入生だけでなく在学生に対してもディプロマ・ポリシーを伝える機会を作っている。(児童学科)
- ・学生の多様な研究主題に対応すべく、修士論文の作成に必要な研究指導の一部を担う教員を非常勤講師として採用している。このことによって、学生はより高度な指導を受けることができ、研究レベルの向上につなげている。(人間生活学研究科)
- ・ハイブリッド授業の導入にあたり、学科でも必要機材を整備し、授業運営を行える体制を整えている。(現代家政学科)
- ・卒業研究の履修に向けて「倫理チェックシート」を作成し、研究倫理に関する教育を展開している。(児童学科)
- ・学科内に「遠隔授業ワーキンググループ」を設置し、オンライン授業においても教育水準が低下しないような対策を講じている。(児童学科)
- ・学修につまずきのある学生については、学科会議で各担任から必ず報告があり、全教員で情報共有をしている。(児童学科)
- ・各実習では報告会を行い、学生同士の学び合いの機会を設けている。(児童学科)
- ・成績評価基準について、科目の到達目標を考慮した判断基準を組織として定めている。(食物学科・人間栄養学科)
- ・成績評価基準とは別に、成績評価分布のガイドラインの策定や答案の返却、模範解答あるいは採点基準の提示等を行っている。(食物学科)
- ・卒業（及び資格取得）に必要な単位取得状況について、チェックシートを配付し、クラス担任と共に確認している。(児童学科)
- ・学科教員で共有するスプレッドシートにおいて、学生の学修状況や所属研究室などの情報を共有している。(生活デザイン学科)
- ・若手教員の研究発表会を実施している。(人間栄養学科)

[来年度に向けて]

- ・アドミッション・ポリシーに入学者選抜の基本方針をどのように記述したらよいか検討する必要がある。
- ・学修成果の評価の方針（アセスメント・ポリシー）を大学として定める必要がある。

[3] 個人レベル

個人レベルとして実施したものは、教員を対象とした「シラバス点検・評価シート」と「個人活動報告書」の2つである。「シラバス点検・評価シート」は、本学で既に作成されている「東京家政学院大学シラバス作成ガイドライン」及び「シラバス第三者チェック表」と一緒に、来年度のシラバスを検討する際に使えるよう作成している。「シラバス点検・評価シート」については、自己点検・評価の初年度ということもあり授業科目数を2科目以上としている。「個人活動報告書」については、1年間の活動を教育、研究、大学運営、社会貢献の4つの視点で振り返られるように作成している。いずれの書類も本学状況を鑑みて作成したものであり、他大学で同様の書式で書類を作成している例はないと考える。

上記の2つの書類を教員一人一人が記入し、それを各教員の所属している学科長を中心とした自己点検・評価委員会委員が、「シラバス点検・評価シート」については「③評価結果」に、「個人活動報告書」については、「②学部長及び学科長からのコメント」に記入している。

「シラバス点検・評価シート」についてはシラバス作成への考え方、「個人活動報告書」については、教育・研究・大学運営・社会貢献に対する考え方について、教員一人一人がしっかり記入しているように思う。非常に多くのことを書いている教員もおり読み応えがある。その記入に対して、学科長を中心とした自己点検・評価委員会委員がコメント等を書いており、普段、口頭では伝えにくいことも書面を通して伝えているように思う。このことを教員相互のつながりや、学科全体の質の保証につなげて頂けたらと考える。又、人間栄養学科では、「シラバス点検・評価シート」及び「個人活動報告書」について、教員相互で確認した上で期日までに提出しており、学科として相互確認するという体制ができており、高く評価できる。

[来年度に向けて]

- ・今年度は教員についてだけ自己点検・評価シートを作成したが、来年度は職員用の自己点検・評価シートの整備が必要である。

4. 今後に向けて

今後の自己点検・評価活動に向けては、次のことを十分に考えながら本学の質が保証されるように実施する必要がある。

- ・本年度の自己点検・評価の結果を各部局で受け止め、来年度の活動計画に活かす。
- ・本学の自己点検・評価の中心的な存在である「自己点検・評価委員会」の活動が教職員から見える形に（透明性の確保）することが大切であり、最も点検・評価、検証される立場になる。
- ・各点検評価チェックシートについては、社会や本学の状況を鑑みて、項目の追加や削除などを行い、教育の質が常に保証されるように点検を怠らない。

5. 外部有識者からの質問や意見など

本学の2021（令和3）年度自己点検・評価活動についての外部有識者からの質問や意見は次の通りである。

(1) 自己点検・評価委員会について

[質問] 客観性と妥当性を担保するために、外部評価委員会などを置いて外部評価を行うのが一般的なところ、外部有識者を自己点検・評価委員会の委員に入れた理由について

(2) 内部質保証に関する基本方針について（方針及び組織体制）

[質問] 自己点検・評価結果を改善に活かすために各階層をつないでいく方法について

(3) 自己点検・評価実施体系図について

[質問] 各種委員会等がどのように関係して、どのようにPDCAを回しているのか。図には、評価結果をどこに回して誰が改善するのか、その流れが描かれていない。

[意見] 図中の自己点検・評価委員会（委員長）と学長の位置が離れていて、現状と異なっている点に分かりにくい。

(4) 自己点検・評価の実施方法及び実施結果について

[意見] 多くの大学が、レギュラーなサイクルになっていない中、貴学は毎年度自己点検・評価を行うよう取り組もうとされているのは良い点である。

[意見] 全学レベルの評価基準に、主要課題を取り入れられているのは、非常に優れた取り組みと考える。今後も続けていかれたら良いと思う。

[意見] チェックシートは、「はい」「いいえ」で回答するようになっている。又、全学レベルの回答が4つの指標で答える形式になっている。最初は分かりやすいが、前年度と今年度の回答の指標が必ずしも同じとは言えないため、この取り組みを継続していくのであれば、前年度の「A」と今年度の「A」がどのように違うかを考えるための数値目標（指標）が必要ではないか。

[質問] 個人レベルのシラバス点検シート・活動報告書は、誰かが点検をしてフィードバックをしているのか。又、組織の評価結果を改善につなげるとなると、個人レベルに落としていくことになるが、どのように落としていくのか。

[質問・意見] 個人レベルの内容は、学科内で相互共有しているのか。学科内で相互共有していれば、学科レベルのFDにもつながるので、それが行われていれば学科レベルのFDは行われているように思う。FDをやっているか否かという点で、研修を実施することにこだわりすぎているように思う。

[質問] シラバスのガイドラインがあるが、個人のシラバスの改善をする際に、個人の裁量でどこまでの改善ができるのか。カリキュラムの制約を受けるところと、そうではないところも含むのか。

[意見] 人によって重きを置く点が他大学の自己点検評価とは違うように思う。年度初めに計画を宣言して、年度末に報告で振り返ることも考えられる。

[意見] 本学（外部有識者の大学）では、授業の担当コマ数が多い人、運営に複数関わっている人など、個人によってかなりレベルが違う。学内役職をしている人が多いため、執行部が調整している。社会貢献についても、個人によって違うため、本学では社会貢献部会があって、そこで個人の活動を点検評価している。

[意見] 自己点検・評価活動のサステナビリティがあれば良いと思った。やればやるほど重装備になるが意味はある。一方でICTを活用したオンライン会議が日常的になるので、やるべ

きことが増え、本来の目的が見えなくなる。どう最適化していくのかを考えながら対応されてはどうか。

[質問] この自己点検・評価のサイクルに、学生が絡むところはあるか。

[意見] 本学（外部有識者の大学）では2019年度前期で授業評価アンケートをやめ、学生が自分を評価するアンケートに変えた。学生に振り返りをさせながら、学修させていく方法にした方が良く考えた。全科目の振り返りに答えないと次学期の履修登録ができないようにした。学生の自己評価は、学生を含め学内に全て開示されている。

(5) その他（本学の組織体制について）

[意見] センターがキャンパスごとにあるが、統合する所がないように見える。図には「各種センター」とあるが、どこが統括する役割を担うのか、外部のものとしては理解が難しかった。組織の立て方と質保証のサイクルを実態に合わせて作った方が良く感じた。又、学生のサポート体制を、どのように学生に分かりやすいように明示していくのかを考えられてはどうかと思った。

6. 学長による総括

令和2年1月15日付の廣江前学長からの「自己点検・評価の今後のあり方等について（諮問）」により設置された自己点検・評価のあり方等検討ワーキング（主査林教授）による答申が、令和3年3月10日付で廣江前学長宛に提出された。答申においては、「実施体制」「評価項目」「実施方法」という3本柱について、現状の分析、問題点及び課題の指摘、改善方策等の提案がなされた。具体的には、自己点検・評価の推進及びその実施組織、組織の構成員、自己点検・評価項目、報告書の様式・作成方法及びその活用方法、学内における自己点検・評価の検証、外部評価の導入等、多岐に渡って、今度の自己点検・評価のあり方や改善の方向性について提言している。

この提言内容を受けて、令和3年度に、白井委員長のリーダーシップの下、チェックシート方式を新たに導入し、「全学レベル」、「組織レベル」、「個人レベル」の3つのレベルでの自己点検・評価を実施した。形式的なことも含め、不備な点、反省すべき点もいくつか出てきたけれども、それを令和4年度に活かしていくこととする。

個人レベルの自己点検・評価については、記載量にそれぞれの熱意の違いが現れている。毎年継続することで、改善を期待したい。また、研究・教育・運営・学外貢献などに対するエフォートの自己申告に基づいて年度毎に評価する仕組みの導入を今後の課題としたい。

外部有識者委員からの意見を真摯に受け止め、自己点検・評価の取り組みのみならず、本学の教育研究活動の改善に活かしていきたい。

以上